

資産形成に向けた 投資リテラシー

長内 智 (株)大和総研
金融調査部 主任研究員



6 投資のリスクとリターンの把握

金融商品ごとの特徴を理解

■リスクとリターンのトレードオフ

将来のための資産形成を行いたいものの、正直なところ「投資は怖い」と考えてしまい、なかなか第一歩を踏み出せないという人も多いと思います。これは、決しておかしいことではありません。なぜなら、人間には、同じ金額の「利益」より「損失」のほうを心理的に強く感じる傾向があるためです。

すべての人が当てはまるわけではないですが、実際、投資で損失が出ることを懸念して、損失回避的な行動を取る人は多いと思います。こうした人間の心理的な特徴や行動は、行動経済学の「プロスペクト理論」という分野で示されています。

このように、投資に対して不安を抱く人が多いという現実を踏まえた上で、押さえておきたいのが投資のリスクとリターンという考え方です。一般に、リスクの低い(高い)金融商品ほど、リターンも低い(高い)とされます。この関係は、「リスクとリターンのトレードオフ」とも呼ばれています。

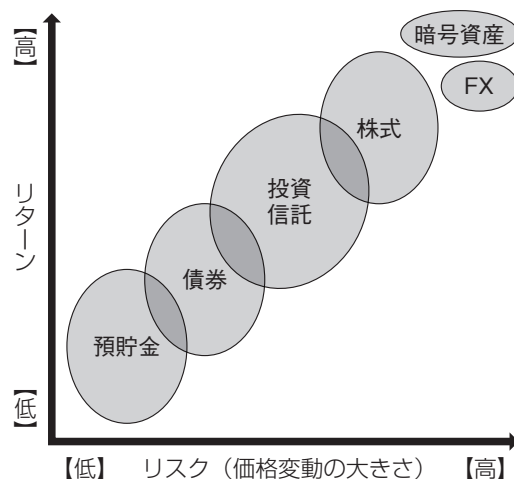
■投資のリスクとは？

投資のリスクといえば、「損すること」を思い浮かべるかもしれませんが。しかし、投資の分野では、「価格変動の大きさ」のことをリスクと捉えます。つまり、価格が大幅に上下動する金融商品ほどリスクが高いと考えます。

金融商品は、リスクとリターンの高低により「ローリスク・ローリターン」「ミドルリスク・ミドルリターン」「ハイリスク・ハイリターン」のように区分されます。こうした関係性に基づき、主な金融商品をわかりやすく整理したのが以下の図表です。

預貯金はローリスク・ローリターンの金融商品と位置付けられます。債券、投資信託、株式などより右上に位置する金融商品ほどリスクが高くなる分、高いリターンを期待できます。投資が怖いという人は、まず相対的にリスクの低い金融商品を選択した上で、他の金融商品を段階的に組み入れていくのがよいと思います。

【図表】リスクとリターンのイメージ図



(注) FXは外国為替証拠金取引。

(出所) 大和総研作成

○ 投資におけるリスク許容度

■人により異なるリスクへの耐性

金融商品のリスクとリターンを考慮して投資を行う際、自分がどれほどのリスクを受け入れられるかという「リスク許容度」を把握しておくことも大切です。投資におけるリスク許容度は、人それぞれ異なり、その人の性格的な要素だけでなく、投資経験や投資の知識、年齢、収入、保有資産額などにも依存します。

例えば、投資経験や投資の知識が十分ある人は、そうでない人より、リスク許容度は総じて高いと思います。若い人は、年齢の高い人に比べ、運用期間や労働収入を得られる期間が長く、投資でいったん損失が出て、その後の挽回を期待できることなどから、リスク許容度は高い傾向にあります。収入や保有資産額が多い人は、一定の損失が出て日常生活への金銭的な影響は小さいと想定されるため、リスク許容度は高いと考えられます。

■投資を経験しながら確認

投資におけるリスク許容度は、頭で考えるだけではわからない場合が多く、実際に投資を経験しながら、確認することも重要です。

例えば、保有している金融商品の価格が下落したときに心理的な負担が大きいとを感じるなら、自分のリスク許容度を超える投資を行っている可能性があります。その場合、相対的にリスクの高い資産を減らすことが対応策となります。

株式であれば、価格変動の大きい銘柄を売却して、価格変動の小さい銘柄を購入することも選択肢となります。具体的には、景気動向に業績が左右されにくく、株価も相対的に安定している「ディフェンシブ銘柄」と呼ばれる企業が購入候補になると思います。

また、投資のリスクに対してより慎重な人は、心理的にほとんど不安を感じない少額から投資を始め、徐々に投資額を増やしていくというアプローチがよいかもしれません。

投資の故事時流

山高ければ谷深し

■バブル崩壊後の株価大幅下落

株式相場は上昇と下落を繰り返し、上昇局面のピークを「山」、その後の下落局面の底を「谷」と呼んだりします。当然、山は高くなったり低くなったり、谷は深くなったり浅くなったりします。そして、山が高くなるほど谷が深くなるリスクにも注意すべきというのが「山高ければ谷深し」という相場の格言です。

日本の株式相場は、1980年代後半の空前のバブル景気で非常に高い山に達した後、バブル崩壊に伴い深い谷へと大幅に下落しました。その後も長期的な経済停滞の下、日本の株価指数は、30年以上もバブル期の高値を超えることはありませんでした。

■2024年8月の株価急落

近年、日本の株式相場は上昇傾向が続き、今年は、日経平均株価が2月22日、TOPIX（東証株価指数）が7月4日に史上最高値を更新するという記念すべき年になりました。

しかし、8月に入ると、歴史的な株高から一転し、株価指数は大幅下落に見舞われました。日経平均株価は、8月5日に前日比4,451円28銭安で取引を終了し、過去最大の下落幅を更新しました。なお、これまでの過去最大は、米国で「ブラックマンデー（暗黒の月曜日）」と呼ばれる株価暴落が発生した日の翌日に当たる1987年10月20日に記録した3,836円48銭安です。

今回も「山高ければ谷深し」の一例といえますが、投資経験の短い人にとって、これほどの株価急落は初めての経験かもしれません。ただし、長期的に投資を続けていると、こうした事態に直面することもあります。もし、株価急落に相当の不安を覚えたという人は、今後様子を見ながらリスクの低い金融商品の比率を高めるといった対応を検討するのがよいでしょう。